

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 9 月 29 日現在

機関番号：13701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730760

研究課題名(和文) 青年期発達障害者の自己理解の特性を踏まえた自己形成支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Self-development of students with developmental disabilities and Educational Practice

研究代表者

小島 道生(KOJIMA, michio)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：50362827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、青年期発達障害者の自己理解の特徴と特別支援学校教師を対象として、自己理解の指導実態について調査した。その結果、特別支援学校では小学部段階から高等部段階の発達を考慮しながら取り組まれていることや効果測定に課題があることなどが、明らかとなった。さらに、発達障害者を対象とした5段階に分かれた自己形成支援プログラムを開発し、その効果について検討され、効果的な支援の在り方について考察された。

研究成果の概要(英文)：The present research examined characteristic of the self-understanding of adolescent students with developmental disabilities and the reality of teaching self-understanding to students with developmental disabilities. As the result, the contents to promote self-understanding have been shown to vary according to the student's development from the elementary, the junior-high, to the high school section. It requires establishing effective methods of measurement. It discussed the effective of educational practice for self-development of students with developmental disabilities.

研究分野：発達障害心理学

キーワード：発達障害 自己理解 自己形成

#### 1. 研究開始当初の背景

青年期発達障害者を対象としては、自己概念や自尊感情など様々な研究が取り込まれてきた。しかし、これら研究では障害種別によるその特性が示される段階でとどまっておらず、その成果を教育・支援にいかした方法論の開発までは到達しておらず、自己の心理学的研究成果と自己形成という教育実践の融合はみられなかった。

そんななか、特別支援教育の分野においても、キャリア教育の必要性が叫ばれ特別支援学校などでも取り込まれている。そこでは、生徒の自己理解の特性や自己形成を考慮した実践が取り込まれているとは言い難く、心理学的な研究成果が十分に反映されていない。そこで、本研究では、発達障害者の自己理解と自己形成という心理学的な観点から、特性を踏まえた効果的な支援の在り方について提案する。

#### 2. 研究の目的

発達障害者の自己理解に関して、その特徴を明らかにすると同時に、学校や教師を対象とした調査により学校教育現場で自己理解の指導をどのように行っているか、現状と課題について明らかにする。次に、発達障害者支援で世界最新の取り組みを行っているイギリスの教育現場で調査を実施し、その教育実践の特徴を明らかにする。最終的には、我が国の教育現場等で実施可能な自己形成支援プログラムを開発し、検証することを目的とする。

#### 3. 研究の方法

本研究は、主に以下の4つの方法で実施される。

1) 青年期発達障害者を対象とした自己理解と自己形成に関する横断的研究及び縦断的研究；主に青年期発達障害者を対象として、自己理解等の測定を行う。なお、縦断的研究は、3カ年を予定している。

2) 国内の特別支援学校教師への自己理解及び自己形成支援の実態と課題に関するアンケート及び面接調査；知的障害特別支援学校教師を対象として、主に自己理解と自己形成支援の現状と課題を明らかにするために、アンケート調査及び面接調査を実施する。

3) イギリスの先進的取り組みの視察と教師への面接調査；世界的にも先進的な取り組みを行っているイギリスの特別支援学校を訪問し、青年期発達障害者の自己理解や自己形成支援の在り方について情報収集を行う。

4) 教育現場でのプログラムの開発に向けて学校教育現場における参与観察と面接調査及びプログラム開発とその効果検証；プログラムの開発に向けて、教育実践現場での観察や教師を対象とした面接調査を実施する。そして、これまでの総括として、教育現場で適用可能な自己形成支援プログラムの開発を試み、その効果について検証する。

#### 4. 研究成果

主な研究の成果は、以下の4点である。

1) 青年期発達障害者の自己理解及び自己形成について；3カ年の縦断的研究により、全体的な傾向として発達障害者の自己理解は行動面から人格特性に関する内容が増加しており、発達のな変化が認められると考えられる。事例的な検討からも、環境の変化が自己理解に影響を及ぼす可能性も明らかとなった。また、学力や運動能力といった能力については他者との比較を行い自らの関係について理解を深めていると示唆された。3カ年の縦断的研究においては、個人差も認められており、自己理解の発達に影響を与える要因などについては、より詳細な分析が必要と考えられた。横断的研究からは、発達障害者の自尊感情、自己評価、自己理解等との関係について明らかとなった。

2) 知的障害特別支援学校教師を対象とした自己理解と自己形成支援に関するアンケート調査；A県内の知的障害生徒を対象とした特別支援学校教師615名を対象として実施した。575名（回収率、93.5%）より回答を得られた。調査項目は、自己理解や他者理解の支援頻度と具体的な支援内容、教師が自己/他者理解を支援するにあたり、必要となる情報であった。主な調査結果として、自己理解支援の具体的な内容は、肯定的側面の理解、好みについての理解、苦手さの理解、行動についての理解にまとめられた。自己理解について、現在から未来についての支援はあるものの、過去から現在への支援については少ないことが明らかとなった。また、友達とかかわりながら自己理解を促す観点が意識はしているものの、実践につながっていない可能性やできるようになったことが中心であり、自分の様々な成長を実感できる支援には十分につながっていない可能性が示唆された。

他者理解の支援では、日々の学校生活の中で、友達の考えや思いについて代弁や、友達の気持ちについて視覚的な手がかりを活用しつつ理解を促すといった実際の場面で友達の気持ちなどを分かりやすく説明することが支援の中心であることが明らかとなった。なかには、友達の交流場面や特別な支援場面を設定して他者理解を深める取り組みもみられた。しかし、他者理解についてはこのような限られた方法でしか取り込まれておらず、他者理解を促す授業方法の在り方について探究していく必要があると考えられた。教師が必要としている情報については、実践例についての情報や実態を的確に把握する方法などが報告されており、具体的な取り組み内容やアセスメントと障害特性に関する情報を必要としていることが明らかとなった。

教師を対象とした面接調査においても、自己理解についてはキャリア教育との関係から、進路決定場面を中心に組み込まれていることや日々の実践の中で、自分の良さについて

て理解を深め、自己肯定感を育てるように取り組んでいることが明らかとなった。その一方、他者理解の支援については、アンケート調査と同様に、他者の気持ちなどの代弁や解説が中心であり、それ以外の方法論について悩んでいることが明らかとなった。

3) 海外の先進的な取り組みの実践として、イギリス・サリー州の Park School などを訪れ、現地の教員を対象に青年期発達障害者の自己理解や自己形成の支援について、面接調査を行った。その結果、知的発達水準や障害特性、さらにはその生徒のこれまでの経験などを考慮して、心理的な支援を展開していることが明らかとなった。ただし、自己形成支援においては、学校卒業後の進路との関係などから、自信を失ったり、理想自己と現実自己のギャップに悩む姿がみられることもあり、自己肯定感を抱くことに困難が生じる場合も認められていた。発達障害者や軽度知的障害者の場合は、友人などの他者との比較などによっても自己形成に影響を受けるが、なにより自己肯定感を抱けるような支援が自己形成に関係していくことが明らかとなった。また、進路決定場面においては、意志決定力の養成も不可欠であり、自己形成支援においては意志決定力を併せて育ていくことも重要な課題であると考えられた。

4) プログラムの開発に向けた学校教育現場での調査等とプログラムの検証；発達障害者の自己理解の特性に基づく自己形成支援プログラムの開発に向けて、これまでのアンケート調査や海外での視察、さらには教育現場での観察や教師を対象とした面接調査、先行研究の分析等を行った。そして、発達障害者の自己理解の特性に基づく自己形成支援プログラムの開発を試みた。自己形成プログラムについては、自己理解の状況に合わせて、およそ以下の5段階に分けて取り組んで行くことになった。

Step1；身体的な感覚を通しての自己理解の段階。この段階では、他者とのかわり、特にペアによる活動を通して、他者への関心・意識を高めながら、身体的な感覚を通じた自己理解を深めることが主な目的となる。

Step2；現在の自分についての理解を深める段階。この段階では、自分の名前や性別といった基本的な属性にかかわる事柄から自分自身はどんな性格であるといった内面世界にかかわる内容までが含まれる。

Step3；自分の良さについて理解を深める段階。現在の自分について理解を深めるだけでなく、自分の良さについて理解を深めることが中心となる。そして、自己肯定感を抱けるように支援していくことになり、この段階は極めて重要であると言える。

Step4；多面的な自己理解と時間軸形成支援。自分には、色々な側面があるという多面的な自己理解を育てることが、良次の段階として求められる。また、過去の自分、現在の自分、将来の自分といったように現在の

自分だけでなく、過去の自分と比較したり、将来の自分について夢を描いたりすることも含む。

Step5；自分らしさの認識。この段階では、多面的に自己を捉えたり、時間軸のなかで自己を捉える力が育ってくるなかで、改めて自分らしさとは、いったいなんだろう、と自ら問いただしながら、自分の輝ける側面を認識し、かけがえのない自分としての意識を深める段階となる。

プログラムについて事例的に検討を行い、検証したところ、発達障害者の自己理解が深まる等の一定の成果が示唆された。しかし、現実自己と理想自己のギャップが大きい時には、自己形成に向けて課題が残る事例がみられた。したがって、理想自己と現実自己の差が大きい場合に、どのような支援を行うかといった点について課題が残り、プログラムの限界についても明らかとなった。

本研究から、青年期発達障害者の自己理解に基づく自己形成支援に向けて、自己理解の発達段階に考慮しつつ、支援内容と関係づけながら検討していくことが可能になると言える。自己形成にかかわり、海外の視察からは自己肯定感や意志決定力などが、改めて再確認された。本研究から、自己理解の発達段階を考慮したプログラムが作成されたと言え、自己理解は青年期になってから急に支援をするのではなく、小学生の段階から少しずつ取り組まれており、支援が大切になると言える。

さらに、今後の展望として、本プログラムの実施においては、理想自己と現実自己のギャップが大きいほど対応に苦慮する可能性がある。この背景には、自己肯定感の低さが影響していると考えられる。今後、こうした理想自己と現実自己の不一致が大きい事例、意志決定力に課題のある事例に対する支援などについても研究を蓄積し、具体的な解決方法について探究していく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

小島道生、発達障害のある子どもの自己肯定感をどう育てるか、総合教育技術、査読無、第 70 巻第 2 号、2015、pp26-29

小島道生、知的障害のある児童生徒の意志決定支援-日本における現状と課題-、発達障害研究、査読無、第 35 巻第 4 号、2013、pp296 ~ 303

小島道生・納富恵子、高機能広汎性発達障害児の自尊感情、自己評価、ソーシャルサポートに関する研究-通常学級に在籍する小学 4 年生から 6 年生の男児について-、LD 研究、査読有、第 22 巻第 3 号、2013、pp324 ~ 334

〔学会発表〕(計 5 件)

小島道生、障害のある子の自己理解(最新研究レクチャー、招待講演)、日本発達障害学会第 50 回大会、東京学芸大学(東京

都小金井市) 2015年7月5日  
小島道生、思春期・青年期発達障害者の自己理解と社会性の支援(自主シンポジウム、話題提供)、日本LD学会第23回大会、大阪国際会議場(大阪府大阪市)、2014年11月23日

小島道生、発達障害児の自己肯定感を育む教育・支援の在り方(自主シンポジウムでの話題提供)、日本LD学会第23回大会、大阪国際会議場(大阪府大阪市)、2014年11月23日

小島道生、特別支援学校における知的障害児の自己/他者理解の支援(ポスター発表) 日本特殊教育学会第52回大会、高知大学(高知県高知市)、2014年9月22日

Michio Kojima、 Supporting career education and teaching of self-understanding at special schools for students with intellectual disabilities in Japan、 IASSIDD Asia-Pacific Conference、 *Journal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities*、 Volume10、 Number2、 August 23、 2013、 Waseda University(東京都新宿区)、 pp.138.

〔図書〕(計 3件)

小島道生他、ジアース教育新社、発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育、2014、pp21~27、30~32

小島道生、学研、発達障害のある子の「自尊感情」を育てる授業・支援アイデア、2013、pp1~158

小島道生他、日本文化科学社、ダウン症ハンドブック改訂版、2013、pp136~140

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
本研究成果については、研究報告書を作成している。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小島道生 (KOJIMA, Michio)  
岐阜大学・教育学部・准教授  
研究者番号：  
50362827

(2) 研究分担者

なし  
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし  
研究者番号：